

ドラマデザイン社
第2回ジュブナイル脚本大賞受賞

『テイクオーバーゾーン』

脚本
岩島朋未

◆登場人物表

田中沙里 (14)

中三。陸上部短距離選手

庄司雪菜 (14)

沙里のクラスメート。陸上部

高須光星 (14)

中三。沙里の彼氏。陸上部

高須円佳 (17)

光星の姉。受験生

菊名明日実 (14)

陸上部三年。リレーメンバー補欠

徳島果歩 (14)

陸上部三年

小林紘代 (13)

陸上部二年。リレーメンバー

佐々木梨津 (13)

陸上部二年。リレーメンバー

乾平太 (12)

陸上部一年

大谷來未 (14)

沙里のクラスメート

船元猛 (14)

柄の悪い光星の友人

田中謙一 (39・45)

沙里の父。

庄司弘和 (47)

雪菜の父

庄司芙美 (37・43)

沙里の実母。雪菜の継母となる。

庄司斗真 (4・10)

沙里の実弟。雪菜の継弟となる。

海老沢伸司 (39)

体育教師。沙里の担任。陸上部顧問。

千川弓子 (69)

沙里の母方の祖母

梶原琴乃 (14)

沙里のクラスメート

高須芳子 (46)

光星の母

高須昭人 (49)

光星の父

国見忠雄 (60)

校長

沙里の子供時代 (8)

その他

【テイクオーバーゾーンとは】

陸上のリレー競技で、バトンを受け渡すことができる範囲。長さ20メートルで、これ以外の場所での受け渡しは失格となる。

○ 春。遠くに見える山々。住宅街と田畑が広がっている。
桜が散っていく。

○ 田中家・前

親指の爪を噛んでいる少女・田中沙里(8)。

戸建ての家の前に立ち、前方を見つめている。

沙里の隣には、父・謙一(39)。

沙里の視線の先には、スーツケースを引く母・芙美(37)と、芙美に連れられて行く弟・斗真(4)。二人は遠ざかっていく。

斗真は振り返り、不思議そうに沙里を見る。

沙里「斗真……」

沙里は斗真に小さく手を振る。

斗真は元気に手を振って、

斗真「ばいばーい！」

芙美は斗真の手をぐいっと引く。

沙里「……」

謙一に行けと背中を押されるが、沙里は謙一の手を握る。

沙里「お父さんと待ってる。戻ってきてくれるよ。きっと元通りになる……」

謙一の手を握る力が強くなる。

○ 田中家・キッチン(リビング)(六年後・夜)

薄暗い室内。テレビがついたままである。

ソファで、パンツ一丁で眠っている謙一(45)。いびきをかいている。

謙一の髪はボサボサ。無精ひげを生やしている。足元には、脱ぎ捨てられた土木作業服。

謙一の側に、少女が立つ。

その少女は爪を噛んでいる。もう片方の手には、包丁。

テレビの明かりに照らされるその人物は、沙里(14)。

沙里は謙一を見下ろして、

沙里「呟いて(い)いい加減にしろよ、クソ親父……」

包丁を振りかざす。

× × ×

朝。部屋に差し込む、温かな日差し。

キッチンで包丁を洗っている沙里。

ヘアアイロンで巻いてある髪。緩く着こなしたブレザー。短い丈のスカート。派手目な外見である。

テーブルにはご飯、味噌汁、卵焼き、ウインナーといった朝食が並ぶ。
ソファで横になっている謙一が目を覚ます。

謙一「(寝ぼけて)家か」

沙里「おい」

沙里は棚に置いてあるプリントを取り、謙一の目の前に突き出す。

プリントには、『陸上部 活動費用について』と書かれている。

沙里「引き落としされてないって。また銀行に金入れてなかったのかよ」

謙一「(プリントに目を通して)こんなの知らねーぞ」

沙里「(棚を指差して)そこ片付けないからだよ。ちゃんと見とけ」

謙一は返事の代わりにゲップ。

沙里「酒クセエ。足くらい洗え！ いい加減、自分の部屋で寝ろ！」

謙一「部屋まで行く体力が無いんだよ」

不機嫌な沙里は、先に朝食を食べ始める。

のろのろ動き出す謙一。二日酔いで頭を押さえている。

席に座った謙一は味噌汁の御椀を取ろうとするが、沙里側に倒してしまう。

沙里「！」

慌てて立ち上がる沙里。

沙里「ふざけんなよ！ 近いうちにぜってえ殺す！」

○ 同・廊下く玄関(朝)

沙里が靴を履いている。

風呂上りの謙一が脱衣所から顔を出して、

謙一「沙里。部活やんの？」

沙里「当たり前なんですけど」

謙一「払う必要ねえだろ」

沙里「大した金額じゃないでしょ。この前パチンコで勝ったの、知ってるから」

謙一「(半笑い)部活につき込んで、将来金が増えるのか？ そんな事より勉強しろ」

沙里「勉強なんて意味ないし。中学卒業したらこんな家、さっさと出ていくから」

謙一「へえ。出て行ってどうすんだ」

沙里「働くんだよ」

謙一の靴を踏みつけてから、沙里は出て行く。

○ 同・玄関く家の前(朝)

家の周りは手入れされておらず、雑草が生い茂っている。

家を出た沙里。

通りには、登校する小学生達。

彼らは家の前で見送る母親に、手を振っている。
沙里「マザコン」

小学生達、顔をしかめる。
沙里は鼻で笑って去る。
歩いていると、爪を噛み始める。

○ 田んぼ道(朝)

山に囲まれ、穏やかに流れる川がある。のどかな雰囲気。
田んぼ道を歩く沙里の姿。
少し先に、学校の校舎が見える。

○ かすみ中学校・全景(朝)

住宅に囲まれた場所にある学校。

○ 同・体育館(朝)

全校生徒、およそ二百名が整列している。
沙里は梶原琴乃(18)他、派手目な女子生徒二人と話をしている。
舞台脇のマイクの前に、教師・海老沢伸司(39)が立つ。

海老沢「静かに。続いて、各部活動の表彰に移ります。陸上部、田中沙里」
琴乃「沙里、また何か走ったの？ すげーじゃん」
沙里「まあね」

海老沢「同じく陸上部、庄司雪菜」

雪菜の声「はい」

沙里が列の間を通っていると、飛び出してきた庄司雪菜(14)とぶつかる。
雪菜は地味で暗い印象。

雪菜「ぎこちない笑み」こめんね、沙里ちゃん」
沙里「(小声で)ウツザ」

と、ぶつかった箇所を手で払う。
舞台に上がった沙里と雪菜。

向かいに立つ校長・国見忠雄(60)が賞状を広げる。

国見「春季陸上競技大会、100m走、一位。田中沙里。あなたは本大会において、頭書の成績を得たので、その榮譽を表彰する——」
沙里は得意げに賞状を受け取る。

国見「同、100m、三位、庄司雪菜。以下同文」
賞状を丁寧に受け取る雪菜。

二人は舞台を降りる。

沙里「嫌味っぽく）リレーも獲れるはずだったんだけどな」

雪菜「初めて出た子もいたし、仕方ないよね」

沙里「なめてんの？」

雪菜「焦って）そんなわけないよ」

海老沢「（マイクで）そこ。早く戻りなさい」

二人はそそくさと元いた場所に戻る。

琴乃達に賞状を見せる、得意げな沙里。

雪菜は賞状を見て、小さくため息。

○ 同・教室

ざわついている教室内。

沙里は席が少し離れた琴乃と馬鹿笑い。

雪菜が前に立ち、黒板に様々な係を書いている。

『号令係』『教科連絡係』『黒板係』等。

海老沢が後ろの方に座って、生徒達の様子を見守っている。

騒いでいる沙里に呆れて、

海老沢「田中。口にチャック」

沙里と琴乃、悲鳴を上げる。

沙里「ヤバイ。チャックだつて」

と、沙里は手を叩いて笑う。

書き終えた雪菜は向き直り、

雪菜「やりたい係がある人は、立候補して下さい」

下を向いているクラスメート達。

雪菜「海老沢先生……」

海老沢「（全員に）決まるまで終わらないぞ」

沙里「委員長、窓係がないんだけど」

雪菜「窓？」

沙里「小学校の時なかった？ 窓の開け閉めするの。私、それやるから」

雪菜「それは窓側の席の人にお願ひすれば……」

沙里「じゃあ私、今から窓側。（窓側の席の生徒に）ね、替わってよ」

海老沢「田中」

沙里「どうせすぐ席替えやるでしょ。やる気無い人はクジで適当に決めちゃえばいいん

だよ。こういうので時間取るの、勿体ないと思いまーす」

雪菜「皆さんは、どうでしょう。何か意見ありませんか？」

しんとしている教室内。

沙里「ほらあ。委員長、冴えてない」

クスクス笑っている沙里や琴乃達。

○ 同・廊下

チャイムが鳴り、沙里は琴乃達と廊下に出る。

海老沢が廊下に出て来て、

海老沢「田中」

沙里「何だよエビセン。トイレ行きたいんだけど」

海老沢「後で職員室に来なさい」

沙里「？」

○ 同・職員室

席に座っている海老沢。

向かいに立つ沙里に、用紙を見せる。

海老沢「この前出してもらったコレ。もっと考えて書きなさい」

用紙は進路希望調査票である。

第一希望に『しゅーしよく』とある。第二、第三希望は空欄。

沙里「考えたよ。ウチ、片親だし。これ以上負担かけるのもなーって」

海老沢「沙里の目をじっと見て」……」

沙里「生徒信じろよ」

海老沢「お父さんと、話し合ったのか？」

沙里「(とぼけて)うん」

海老沢「スポーツ推薦だって、今後の頑張り次第で狙えるんだぞ」

沙里「高校でも勉強すんのヤダ」

海老沢「高校に行けば、新しい出会いだってあるし、自分にできる事とか、色んな可能

性が格段に増える」

沙里「別に、友達ならいるし。出会いも充分っていうか」

海老沢「もう一度、じっくり考えて提出」

沙里「(ムツとして)じっくり働く事を考えよーっと」

海老沢から用紙を奪うように取る。

○ 同・校庭

野球部、サッカー部等の運動部が、準備運動をしている。

校庭の脇には、十数名の陸上部員の姿。

高跳びのマットを設置したり、幅跳びの砂場をならしている。

沙里がやってくる。

真新しい学校指定ジャージを着た男子部員・乾平太(12)が背筋を伸ばして、

平太「(緊張)こんにちは!」

沙里「(適当に)はいー」

沙里は近くの体育用具庫へ。

○ 同・体育用具庫

覗き込む沙里。

沙里「光星、いるー?」

高須光星(トセ)と、船元猛(トモ)他、柄の悪い生徒四名がトランプを広げている。

光星「沙里、エビセンに呼び出されたって?」

沙里は光星の隣に座る。

沙里「マジ面倒臭い。何であいつが担任なの」

光星「(軽い調子で)地獄だな」

三年陸上部員の菊名明日実(トモ)、徳島果歩(トモ)が遠慮がちに入ってくる。

明日実「沙里、ハードル取っていい?」

沙里「どーぞ、どーぞ」

ハードルを取ると、そそくさ出て行く二人。

○ 同・校庭

体育用具庫から出て来た明日実、果歩。

雪菜が黙々と白線ラインを引いている。

明日実「部長!」

雪菜「(顔を上げて)はい」

明日実「用具庫がたまり場になってるの、どうにかならない?」

雪菜「沙里ちゃんと光星君は、一応部長だし」

果歩「何にもしないなら帰ればいいのに」

雪菜「練習する時は、ちゃんとしてるから」

明日実「じゃあ練習するように、部長が注意してよ。私ら、関わりたくない」

雪菜「……わかった」

○ 同・体育用具庫

恐る恐る中へと入る雪菜。

沙里達は気付いて、

沙里「何か用?」

雪菜「そろそろ練習、した方がいいんじゃないかな」

沙里「私より遅い人に言われたくないんですけどお。練習した方がいいのはそっちでし

「よ」

光星はトランプを投げ出して、

光星「あー負けた。もう終わり！」

沙里「帰ろっか」

雪菜「え！？ ちょっと」

沙里は光星に寄り添い、出て行く。

雪菜は沙里の背中にため息。

○ 街道

のんびり歩いている沙里と光星。

光星は自転車を押している。

光星「どうすっか。ウチに来る？」

沙里「夕飯作らなきゃだから。ここでいいよ」

光星「じゃあ、また明日な」

沙里「おばさんよろしく言っといて」

分かれ道で、光星は自転車に乗って行く。

見えなくなるまで手を振る二人。

○ 田中家・リビング

帰って来た沙里。

冷蔵庫の中を覗く。

棚を一段占領しているビール缶、酒のつまみ、調味料しかない。

沙里「……」

棚の引き出しから、『生活費』と書かれた封筒を取り出す。

小銭がパラパラ落ちてくるだけ。

封筒の中身を確認。

沙里「またかよ……」

○ 同・沙里の部屋

六畳程の洋室。

整理整頓された室内。

沙里は机の引き出しを開け、奥の方から鍵付きの缶ケースを出す。

中にはお札が何枚も入っている。

その中から、五千円札を取り出す。

○ スーパー(夕)

沙里は手際良く、野菜、卵、乳製品等をカゴに入れていく。

菓子のコーナーを通過しようとした時、立ち止まる。

沙里「――」

しゃがみ込んで、じっと菓子をみつめている少年、斗真(10)。

沙里「……斗真？」

斗真「振り向いて……あ」

沙里「斗真！」

沙里は斗真の元へ駆ける。

沙里「斗真だよね！ 本物だ！ おばあちゃんの所じゃないの？」

斗真「勢いに圧倒されてはい」

沙里「二年ぶり？ ヤバい、背が伸びてる」

斗真「お久しぶりです」

沙里「生意気。姉弟なんだから、ヨッくらいでいいのに」

斗真「戸惑ってはい……」

沙里「何でここにいるの？」

斗真「三月から、こっちに引っ越してきて」

沙里「え？ おばあちゃん達と？」

斗真「お母さんと、僕とで」

沙里「……お母さん、今いるの？」

斗真「家にいます」

沙里「安堵したよう……。何買おうとしたの？ それ？」

と、玩具入りの菓子を指さす。

斗真「頷く」

沙里はその菓子を自分のカゴに入れる。

沙里「買ってあげよう」

斗真「いいです。見てただけだから」

沙里「遠慮するなよ」

× × ×

レジで会計を済ませる沙里。

玩具入りの菓子を斗真に渡す。

斗真「……ありがとうございます」

沙里は商品を袋に詰めながら、

沙里「今から家に来なよ」

斗真「でも、塾があるから」

沙里「塾……行ってるんだ」

斗真「もう時間だ。さよなら」

斗真はお辞儀をすると、そそくさと店を出て行く。

沙里「塾ねえ……」

沙里、爪を噛む。

○ 住宅街(夕)

買い物袋を提げて歩いている沙里。

近くの家から、母親の怒鳴り声と子供の泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

母親の声「またあんたはあ！」

幼い子供の声「泣いて」ごめんなさい」

母親の声「ごめんって言うような事なら、最初からやるんじゃない！」

沙里「……」

沙里は立ち止まり、その家の方を見る。

母親の声「あんたはなんでいつもそうなの！」

芙美の声「重なって」なんでいつもそうなの！」

○ 田中家(沙里の回想・六年前)

リビング。

テーブルに零したジュースが、ポタポタと床に滴っている。

八歳の沙里の服はオレンジジュース色に染まっている。

怒りの表情で立っている芙美。

沙里「ごめんなさい……」

芙美「わざとでしょ。お金無いのわかってて、わざとやってるんでしょ」

沙里「お菓子で手がベトベトになったから、お手拭き取ろうとしただけなの」

芙美「なんで口答えするかな」

芙美は沙里の頬や手を叩く。

芙美「この口が、この手がいけないのかな！ ねえ！」

芙美は沙里の顔を床に押し付ける。

芙美「飲みなさいよ。あんたの為に買ったジュースでしょ。あんたが欲しいって言ったんでしょ！」

沙里は泣き叫ぶ。

× × ×

家計簿に書き込んでいる芙美。頭を抱え、唸っている。

ポータブルゲームで遊んでいる沙里。

幼い四歳の斗真が覗き込んで、

斗真「お姉ちゃん、貸して。ねえ、貸してよ」

斗真がゲーム機を取ってしまう。

沙里「斗真、ダメ」

芙美は家計簿に目を落としたまま、

芙美「うるさいわよ。静かにして」

二人は聞く耳を持たず、ゲーム機の取り合い。

斗真「斗真もやりたい」

沙里「今私がやってるの」

取り合ううちに、弾みで斗真は転んで泣いてしまう。

芙美「！ 何してるの」

芙美がどかどかどかやって来て、

芙美「斗真に何した」

沙里「(怯えて)違う。斗真が取ろうとしたから」

芙美「あんたはなんでいつもそうなの！」

芙美は沙里の頬を叩く。

泣き出す沙里。

沙里「斗真が勝手に取ったの、ママちゃんと見てないのに」

芙美「口答えするんじゃない！ 謝りなさい。斗真が泣いてるでしょ」

沙里「私がゲームやってたのお！」

芙美「ああもう、こんなのがあるからいけないんだ」

芙美はゲーム機を取り上げ、へし折る。

沙里「ばあばに買ってもらったのに！ 私のなのに！」

芙美「うるさい！」

沙里「ママなんか嫌い！」

芙美「——」

沙里の手を掴み、庭へと放り出す。

沙里「違う、嫌いじゃない！」

芙美「そんなにゲームしたいなら、してればいいわ」

真っ二つに折られたゲーム機を沙里に投げつける。

そして窓の鍵を閉める。

慌てた沙里は窓をドンドン叩く。

沙里「開けて、ママあ！」

室内で、泣いている斗真を優しく抱きしめる芙美が見える。

沙里の泣き声と、別の子供の泣き声が被さって——

回想終わり。

○ 元の住宅街(夕)

近所の家から聞こえる子供の泣き声。

立ち尽くす沙里。

沙里「笑えてきて」……」

沙里は怒鳴り声のする家に、

沙里「(大声)通報するぞー！」

沙里は駆け足で逃げる。

走りながら、沙里は笑う。

○ 田中家・リビング(夜)

オムライスを食べている沙里。

食器の音が響く。

沙里「……」

前方を見ると、柱に身長を書いた印がある。

沙里は柱の前まで行く。

斗真の身長の間は四歳が最後。沙里のものだけが更新されている。

沙里は斗真の身長を思い出すように、手を胸元に。

そしてペンで柱に線を引く。

沙里とは十五センチ程の身長差。

沙里は新しく書いた印を撫でる。

まだインクが乾いておらず、少し手についてしまう。

○ かすみ中学校・校庭(翌日)

運動部の掛け声や、吹奏楽部の練習する音が響く。

校庭の隅で集まっている陸上部員達。海老沢を囲んでいる。

沙里や光星の姿もある。

海老沢「来月の地域別大会のリレーメンバーを発表するぞ。まず女子。一走、佐々木。

二走、小林。三走、田中。四走、庄司。補欠に――」

目を見開く沙里。

ざわつく部員達。

沙里「ちよつとエビセン！ 何で私が三走なの？ アンカーでしょ！？」

海老沢「この前の大会を見て考えたんだよ。これで行ってみようと思う。次、男子」

沙里「ありえない」

沙里は雪菜を睨む。

部員達も雪菜を睨む。

雪菜「(恐る恐る)海老沢先生。私も意見したいんですけど」

海老沢「？」

雪菜「沙里ちゃんは、練習にもあまり出ていないです。真面目に練習してきた人達が可

哀想じゃないかなと」

沙里「はあ？」

雪菜「二年の佐々木と小林の名前が出るのは当然かもしれないけど。三年で、この前自己ベストが出た人もいるので」

海老沢「これは最終決定じゃない。今後の調子次第で、変更も充分あるからな」

雪菜「……」

沙里「……」

× × ×

片づけをしている部員達。

体育用具庫前で、沙里が雪菜をど突く。

沙里「こういう時だけ部長ぶってんじゃねえよ」

雪菜「ごめんなさい。でも……」

沙里「私無しで、表彰台上がれると思ってんの？」

部員達が二人の様子を見ている。

雪菜「沙里ちゃんが部活に出てない間、皆は頑張ってるよ。その人達の代表で走るのに、失礼にならないかな」

沙里「この前の春季大会だって、あの辺の遅い人達、バトンパスをミスってたよね。アーカーの私がいなかったら、ビリだったと思うけど？」

雪菜「それは、練習していけば良くなってくる」

二人の間に、光星が割って入る。

光星「まーまー。二人で勝負すればいいんじゃないやね？ 沙里が勝ったら文句無し。庄司が

勝てば沙里がメンバーから降りたらいいよ」

沙里「勝手に決めないでよ」

光星「余裕だろ」

沙里「まあ……」

戸惑う雪菜。

他の部員達は、光星の提案に賛同している様子。

雪菜「……いいよ。やる」

光星「よし。(部員達に)お前ら、ちよつとコース開けとけよ」

目が合う沙里と雪菜。

雪菜の真剣な目つきに、沙里は一瞬たじろぐ。

× × ×

スタートラインに立つ沙里と雪菜。

二人とも、真剣な表情。

光星「いくぞ。用意……スタート！」

ダツと駆けだす二人。

沸く歓声。

二人が走る、スパイクの音。

沙里が先にゴールする。

沙里「(息を切らして)はい、余裕」

雪菜を見ると、泣いている。

雪菜は部員達に頭を下げる。

雪菜「ごめんなさい。部長なのに」

雪菜を慰める部員の姿も。

沙里「……。ばっかみたい」

沙里はラウンドを後にする。

光星はこの場にいづらくなり、沙里の後を追う。

○ スーパー(夕)

カゴを持った沙里と、ついて歩く光星。

沙里は辺りを見回している。

菓子コーナーを通る。

斗真が、沙里が買ってやったのと同じ玩具付きの菓子を手に持っている。

沙里「嬉しい……」

光星「知ってるの？」

沙里「……弟」

光星「え。ずっと前に別れた？」

沙里は斗真を愛おしく見つめて、

沙里「可愛いでしょ。(声を掛けようと)斗真——」

芙美の声「斗真」

沙里「！」

沙里は柵に身を隠す。

光星も思わず、一緒になって隠れる。

化粧をし、上品な服装を身に纏った芙美。

斗真の元へと来る。

芙美「お菓子は買わないの」

と、玩具付きの菓子を柵に戻す。

斗真「うん……」

光星「あの人って……」

沙里「……」

芙美と斗真はレジへと向かおうとする。

二人の元へ駆け寄る女子中学生。

雪菜である。

沙里「!？」

芙美「おかえり。部活終わったの？」

雪菜「うん。手伝いに来た。荷物、大変だと思って」

芙美「ありがとう。今日はね、アクアパツア」

と、雪菜にカゴの中身を見せる。

雪菜「大きい魚」

雪菜は視線を感じたのか、顔を上げる。

沙里と光星がいるのに気付く。

雪菜「——」

沙里「……なんで」

芙美「雪菜ちゃん、どうしたの？」

と、芙美は雪菜の見る方に視線をやる。

芙美「あ——」

沙里「……お母さん……」

芙美は戸惑いながらも、微笑んでみせる。

芙美「沙里……こんな所で会うなんて。買い物？」

沙里「うん……」

芙美「昨日、斗真のお菓子を買ってくれたんですって？ ありがとう」

沙里「……なんで、雪菜が一緒にいるの？」

芙美「なんでって……。あの人から聞いてるでしょ？ 再婚の話。雪菜ちゃんのお父さ

んとって」

沙里「！」

○ 田中家・リビング(夜)

帰ってくる謙一。

謙一の顔は脂汗でベトベト。着ている土木作業服は泥汚れがついている。

謙一「疲れた様子で」ただいま」

冷蔵庫からビール缶を取り出して、ぐびぐび飲む。

沙里が黙って席についている。

謙一「？ ただいま」

沙里「そこ座って」

謙一は訳もわからず、席につく。

沙里「お母さんの再婚、私の同級生の親とだって」

謙一「……ああ」

沙里「私、何も聞いてない」

謙一「母さんの話するの、お前、嫌がってただろ」

沙里「それでも言ってるよ！ どうしてあいつの親と。知ってたら絶対……」

謙一「止めたのか？」

沙里「……。どう思ってるの？ 地元にいるんだよ。新しい家族と。嫌じゃないの？」

謙一「……母さんに、良い相手が見つかったっただけだ」

沙里「(失望して)」。クソ親父」

沙里はリビングを出る。

階段が上がっていく音。

謙一「……」

○ 同・沙里の部屋(夜)

部屋に入った沙里は、足元にあったクッションを蹴る。

ベッドに寝転がり、親指の爪を噛む。

○ かすみ中学校・全景(翌日)

○ 同・女子トイレ

沙里が雪菜の制服を引っ張って来る。

雪菜「痛ッ やめて」

壁に押し付けて、

沙里「私に何か言う事あるよね」

雪菜「……」

沙里「黙ってんなよ！」

雪菜「いつか、言わなきゃと思ってた。けど、私も自分の事でいっぱいっばいで」

沙里「――」

沙里は雪菜を倒す。

床に尻餅をつく雪菜。

雪菜「知ってると思ってた」

沙里「――」

沙里は個室トイレのドアを蹴り、トイレを後にする。

○ 同・校庭

ウォーミングアップをしている陸上部員達。

沙里はその横を通り、門へと向かう。

海老沢「田中！ リレーの練習するぞ！」

沙里「腹痛いから帰る」

高跳びのマットでゴロゴロしていた光星。
起き上がって、

光星「俺も帰ろーつと」

光星は鞆を手には、沙里の元へ。

海老沢「光星！ お前は戻れ」

光星「俺も腹が痛いのに」

海老沢は肩を落とす。

雪菜は去って行く二人の背中を見つめている。

○ 高須家・前

光星は戸建ての玄関扉の鍵を開ける。すぐ後ろには、沙里。

沙里は制服のリボンの位置を直し、手で髪を整える。

その時、ガレージに車が停まる。

車から光星の母・芳子(46)が出て来て、

芳子「おかえり。沙里ちゃん、いらっしやい」

沙里「こんにちは！」

芳子は車から、買い物袋を取り出す。

沙里「持ちますよ」

芳子「いいの、いいの。光星、あんたが持つの」

光星「めんどくせえな」

そう言いつつも、光星は荷物を持つ。

沙里はクスツと笑う。

○ 同・光星の部屋(夕)

沙里と光星、スナック菓子をつまみながら、お笑いのDVDを見ている。

沙里はテレビの隣にある本棚を見て、

沙里「漫画増えた？」

光星「姉ちゃんの。置く場所無いらしい」

沙里「読んでいい？」

光星「おう」

沙里、漫画の単行本を読み始める。

しばし無言の二人。

光星は菓子をつまみ、テレビを観ている。

沙里は光星に寄りかかる。

沙里「……」

穏やかな表情の沙里。

その時、ノックの音。

沙里は光星からぱっと離れる。

芳子が覗き込んで、

芳子「沙里ちゃん、夕飯食べていくでしょ？」

沙里「嬉しい(笑)はい！」

○ 同・ダイニング(夜)

食卓を囲む沙里、光星、芳子、光星の父・昭人(56)、光星の姉・円佳(17)。

高須家の一同、笑っている。

沙里は周囲に合わせて笑顔。

光星はすき焼きの肉をいくつも取る。

円佳「ちよつと。取りすぎ」

光星「姉ちゃんのダイエットに協力してんだよ」

円佳「肉は別腹だよ！」

と、光星の頭を軽く叩く。

芳子「やめなさい。恥ずかしい」

昭人「沙里ちゃん、遠慮しなくてもっと食べな」

沙里「微笑んで(笑)はい」

賑やかな高須家を見ていて、沙里は次第に笑顔が消えていく。

箸と茶碗を持つ手が下りる。

光星「沙里、どうした」

沙里の目に涙が溢れている。

沙里「笑ってみせて(笑)お腹いっぱい(笑)」

円佳「光星、何した」

光星「なんもしてないって」

沙里「違うんです。ごめんなさい。何でもないんです」

沙里の目から、涙がポロポロ零れる。

高須家の一同、心配そうに沙里を見ている。

○ 田中家・玄関(廊下(夜))

鍵を開ける音。

暗い中、沙里が入る。

電気をつける。

沙里「ただいま……」

靴を脱いで、上がる。

沙里「……おかえり」

リビングへ行き、パタンと戸を閉める。

【閲覧のため、脚本の掲載はここまでにさせていただきます。】